課題文脈が検索容易性効果に及ぼす影響

○織田 涼¹

(1 立命館大学文学部)

キーワード：検索容易性, メタ認知的経験, 自律性

The influence of task context on ease of retrieval effects

Ryo Orita¹

(1 College of Letters, Ritsumeikan University)

Key Words: Ease of retrieval, Meta-cognitive experience, Autonomy

目的

出来事の想起に困難を感じると、出来事の頻度が低く見積もられ、その後の判断は想起した内容に一致しなくなる。これを検索容易性効果と呼び、自己判断や他者判断などの課題で観察されてきた (Schwarz, 2004)。Schwarz (2011) は、困難さの解釈が課題文脈に依存すると主張している。すなわち、自己判断課題においては困難さが自己について示唆的な情報と解釈され、他者判断課題においては他者について示唆的だと解釈されることが考えられる。

この主張の妥当性を検討するために、実験 1 では想起課題の後で、自己判断 (自己の成長感評価) と他者判断 (知人の親切行動の見込み推定) の課題を実施し、その実施順序を操作した。課題に応じて困難さが解釈されるのであれば、困難さは先に課せられる判断課題に影響するが、後の課題には影響しないと予測される。また実験 2 では、2 種類の判断が逆の関連を示す第 3 の判断課題 (自己の自律性評価: 竹澤, 2009) を後で実施した。自己判断と他者判断のそれぞれに応じて困難さが解釈されるのであれば、困難さの影響は、2 種類の判断を介して、第 3 の判断に逆方向に働くと考えられる。

実験 1

大学生 101 名 (年齢 $M=21.1$) が参加し、知人から親切にされた出来事を 1 事例または 4 事例だけ想起した後に、自己判断と他者判断の課題を行った。判断課題の実施順序は、参加者間要因として操作した。その後、想起時に経験された困難さの評定を行った。

想起数、想起の困難さ、自己判断、および他者判断の各変数を用いて Figure 1 のパスモデルを構成し、判断課題の順序別に係数を推定する多母集団同時分析を実施した。課題順序にかかわらず、想起の増加は、強い困難さを経験させた。自己判断を先に実施した群では、困難さが自己判断と負の関連を示し ($\beta=-.38, p=.004$)、他者判断とは有意な関連を示さなかった。逆に、他者判断を先に実施した群では、困難さが他者判断との有意な負の関連を示し ($\beta=-.40, p=.002$)、自己判断との関連は有意ではなかった。これらの結果は、困難さが先行する課題に応じて解釈されることを示している。

Figure 1. 実験 1 のパスモデル。パス係数は自己→他者判断群 (上段) と他者→自己判断群 (下段) に分けて推定した。

実験 2

大学生 99 名 (年齢 $M=20.6$) が参加し、想起課題後に、他者判断と自己判断のいずれかを実施した。続いて、全参加者が自己の自律性評価と、想起時の困難さ評定を行った。

困難さ評定は、1 事例を想起した参加者より 4 事例を想起した参加者で有意に高かった ($F(1, 95)=5.1, p=.03$)。また、困難さと自己判断の相関 ($r=-.36, p=.01$)、および困難さと他者判断の相関 ($r=-.37, p=.01$) は共に有意だった。

自律性評価 (Figure 2) に対しては、課題と想起数の交互作用が有意だった ($F(1, 95)=6.2, p=.01$)。自己判断後の自律性評価では、1 事例を想起した参加者より 4 事例を想起した参加者が低い値を示した ($F(1, 98)=4.1, p=.04$)。他者判断後の自律性評価では、事例数の効果が有意ではなかった ($F(1, 98)=2.2, p=.13$)。また、自律性評価と自己判断は正の相関関係にあったのに対して ($r=.49, p=.001$)、自律性評価と他者判断は負の相関関係にあった ($r=-.30, p=.03$)。同一の想起課題で経験された困難さが、自己判断と他者判断への影響を介して、自律性評価に対して逆方向の効果を示した。

総合考察

二つの実験結果は、困難さの解釈が課題文脈に依存することを示している。この文脈依存性については、困難さの影響が様々な想起と判断の課題で観察されることから可能性が指摘されてきたが (Schwarz, 2011)、この可能性を同一の課題の中で実証した点に本研究の貢献がある。

竹澤 (2009) は、他者からの援助と自己の成長感の認知が自律性の評価に逆方向に影響することを示した。本研究結果は、この影響の方向が困難さの感覚と課題文脈に規定されることを示唆している。

引用文献

- Schwarz, N. (2004). *Journal of Consumer Psychology*, 14, 332-348.
 Schwarz, N. (2011). In P. L. Lange, A. Kruglanski, & E. T. Higgins (Eds.), *Handbook of theories of social Psychology*.
 竹澤みどり (2009). 学園の臨床研究, 8, 31-38.

Figure 2. 実験 2 の自律性評価の平均値と標準誤差。